



コロナ禍での大学生生活

麻布大学生命・環境科学部の三宅司郎先生よりバトンを受け継ぎ、京都大学農学研究科の白井が執筆させていただきます。三宅先生が堀場製作所におられた数年前に第77回分析化学討論会が龍谷大学で開催されました。その際、実行委員会でご一緒させていただき、大変お世話になりました。京都市のコンベンションセンターや伏見酒造組合などにも二人で交渉に行き、討論会で行われるいくつかのイベントを非常にスムーズに進めることができました。それ以降も学会などでお会いすれば必ずと言ってよいほど一緒にお酒を飲みました。その縁もあり、今回のリレーエッセイにお声がけいただきました。

今年はコロナウイルスのパンデミックにより日本だけでなく、世界中が大変な事態になっており、今なお進行中です。2019年末あたりから、中国の武漢市で新しいコロナウイルスが流行り始め、日本でも2020年1月頃から問題となりました。3月には不要不急の移動は制限するように要請され、4月に入ってからには小中高だけでなく、大学も休校となりました。私は、4月から前任者の加納先生からいくつかの講義を引き継ぐことになっており、準備をしている矢先の出来事でした。4回生が配属され、テーマが決まってこれからというときにすべてが中断して、研究室には教員と秘書さん、そして一部の学生さんのみが活動する状況になりました。講義はWebを利用して、5月から開始することになり、ほとんどの教員がその対応に追われていました。私もWeb対応を含めた講義資料の作成で試行錯誤の毎日でした。そして、5月のWeb講義開始時は、アクセス集中で接続が不安定になったり、接続できないなどの不具合もありましたが、徐々に改善されてきました。物珍しさからか、最初の1か月くらいは例年より活発に質問が出て、Web講義もよいのかと思っておりました。しかし、徐々に質問はチャットのみとなり、数も減ってきました。Web講義に問題があるのかと思ひ、複数の学生に聞くと、録画しているのでも聞いてのどと大学に行かず着替えなくてもよいので気楽でいいとの反応でした。顔出ししないのは、服装や部屋が映らないようにしているのかと納得しました。研究室の大学院生に聞くと、実験しながら聞けるし、こっちの方が良いとの意見もありました。問題は、1年生と外部から来た大学院生、そして留学生に対するケアでした。また、大変なのは学生実験でした。私どもの研究室は学部3年生の学生実験（月曜日から金曜日の午後3～5限）を毎年4月初めから5月中旬頃まで担当していますが、今年は変則的に、Web講義を5月に行い、実習は後期に行うということになりました。しかし、後期にできる保証はありませんので、6月末にコロナが少し収まった時に必要最小限の実習を行うことが急遽決まりました。密にならないように学生を3班に分けて、実験内容も絞り、3交代制で行いました（その後、10月にも1週間程度実習を行いました）。クラスターの発生もなく、無事実習を伴う実験は終了しましたが、助教の北隅先生やTAの学生さんたちも大変だったと思います。この頃には、密にならないように気を付けながら研究室活動も再開してきました。



8月の大学院入試も何とか無事に終え、9月にはいくつかの学会で年会や討論会がWeb上で行われるようになりました。我々も他の方がどのような形式でWeb討論会を運営しているか探りながら、小さな会合から再開し始めました。そうこうしていると、後期に向けて講義資料を作成しなければいけなくなってきました。10月に入ると、対面式の講義をやらねばいけないという風潮が社会的に強まりましたが、一方で体質や通学の事情などでWeb講義存続を望む学生もいるため、ハイブリッド式講義を行うことになりました。ハイブリッド講義は11月開始となり、写真のようにZoomで同時に配信しながら対面式で講義を行うことになりました（写真は11月4日の第3限目の講義の準備中に撮影したものです）。こんなアクリル板が何の役に立つのかも思いながらも、この前ではマスクを外して話せますので一応役立ちました。終了後は使用したものをすべて消毒し、講義を終えました。2021年以降もこれを続けなくてはいけないのかと思うと複雑な気持ちです。

今回のコロナの影響で社会に対する見方も大きく変わったのではないのでしょうか。PCR検査にアビガン、ワクチンなど、政府や官公庁の対応、そしてマスコミ報道に疑問を持つ方も増えたかと思います。日本分析化学会は、統計的な観点からの意見や分析法の意義を正しく発信する学会であり続けてほしいです。それが、学会及び会員の役割のように思います。

最後になりますが、次号のエッセイは山口大学工学部の中山雅晴先生にお願いしています。第77回分析化学討論会では引き継ぎの際に大変お世話になりました。また、討論会、年会でもご一緒させていただくことも多いので、お願いいたしました。よろしくお願ひいたします。

〔京都大学大学院農学研究科 白井 理〕